論　文

選言接続詞の解釈の第二言語習得研究

大　熊　富季子*

要旨

日本語と英語の選言接続詞は，否定文中で使われる場合には解釈が異なることが知られている。本研究ではこの日本語と英語の選言接続詞の解釈の違いに着目し，英語圏での滞在経験のない日本人大学生が英語の選言接続詞をどの程度正確に解釈できるのかを実験を行い調査した。実験では，先行研究 Grüter, Lieberman, and Gualmini（2010）で用いられたのと同じ真偽値判断タスクを行った。その結果，(i) 日本人大学生による選言接続詞の解釈は，正しい解釈を肯定することと間違った解釈を否定することの両面で，英語母語話者とはかなり異なっていること，(ii) 英語圏での滞在経験のない日本人大学生による選言接続詞の解釈は，先行研究 Grüter et al. で示されたカナダ在住の日本人英語学習者の結果と類似していることが明らかになった。これらの結果は，英語の習熟度が中級になったり，英語圏で 2 ～ 3 年滞在したりしても，正しい解釈の習得が依然として困難であることを示している。ただし本研究では，なぜ選言接続詞の解釈が困難であるかの原因の解明には至らなかったため，今後はその原因を明らかにする必要がある。本研究の結果は，意味解釈の習得は形態素などの習得と比べて比較的問題が少ないという従来の見方を覆す可能性があり，研究を継続することにより第二言語習得に新たな知見をもたらすことが期待できる。

キーワード

第二言語習得，英語習得，選言接続詞，否定

* 立命館大学経営学部　准教授

目　　次

1. はじめに
2. 日英語の選言接続詞の解釈の違い
3. 先行研究
　3.1　Grüter et al.（2010）
　3.2　Okuma（2022）
4. 実験
5. 結果と考察
　5.1　グループ別結果
　5.2　個人別結果
　5.3　Okuma との比較
　5.4　まとめと今後の課題
6. 結論

1. はじめに

第二言語習得研究とは，人が母語以外の言語をどのように習得するのかを明らかにする研究分野で，主に 1950 年代から行われるようになった。そして 1960 年代以降は，英語の動詞の形態素（三単現の -s や過去時制 -ed など）を学習者がどれだけ正確に使えるのかや，言語の統語的特徴を学習者がどのような過程を経て習得するのかを調べる研究が盛んになった。さらに近年は，それらの研究成果をより良い教材や指導法の開発などに活かす試みもなされている（白畑 2015，他）。その一方で，まだ十分に研究がなされていない領域も多く残されており，本研究で扱う接続詞の解釈もそのうちの一つである。本研究では，Okuma（2022）に引き続き選言接続詞の日本語と英語の解釈の違いに着目し，日本語を母語とし英語を外国語として学ぶ学習者が，英語の選言接続詞を正しく解釈できるのかどうかを調査した。

2. 日英語の選言接続詞の解釈の違い

本研究で扱う選言接続詞とは，英語では or，日本語では「か」「または」「あるいは」などが含まれる。例えば下の英文（1a）では，選言接続詞 or が目的語位置に使われているが，この文は，（1b）のように二つの文を接続詞でつなげた形で言い換えることができる。日本語の場合も同様で，選言接続詞「か」を含む肯定文（2a）は（2b）のように言い換えることができる。以上のように，日英語の選言接続詞 or と「か」は，（1）や（2）のような肯定文では同様に解釈される。

（1）a. Mary ate an apple or a banana.
　　b. Mary ate an apple　OR　Mary ate a banana.

（2）a. メアリーはリンゴかバナナを食べた
　　b. メアリーはリンゴを食べた　か / または　メアリーはバナナを食べた

ところが，日英語の選言接続詞は，否定文中で使われる場合にはその解釈が異なることが指摘されている（Crain 2012, Goro & Akiba 2004, Grüter, Lieberman, & Gualmini 2010, 郷路 2019, 他）。例えば（3a）では，日本語の選言接続詞「か」が否定文の目的語位置に使われているが，その解釈は（3b）のように選言接続詞「か」や「または」を用いて言い換えることができる。郷路（2019）に従い，以下ではこの日本語の解釈を選言的解釈と呼ぶことにする。

（3）a. メアリーはリンゴかバナナを食べなかった
　　b. メアリーはリンゴを食べなかった　か／または　メアリーはバナナを食べなかった

これに対し，英語の選言接続詞 or が否定文の目的語位置で使われている文（4a）は，（4b）のように連言接続詞 and を用いて言い換えられる連言的解釈となり（郷路 2019），（4c）のような選言的解釈にはならない。

（4）a. Mary did not eat an apple or a banana.
　　✔ b. Mary did not eat an apple　AND　Mary did not eat a banana.
　　✘ c. Mary did not eat an apple　OR　Mary did not eat a banana.

以上（3）と（4）より，否定文の目的語位置にある選言接続詞の解釈は日本語と英語では異なることがわかる。図 1 はこの日本語と英語の違いを図に整理したものである（Crain 2012）。図 1 が示すように，日本語の解釈（選言的解釈）は，選言接続詞（∨）が否定（¬）よりも広いスコープを取っている。これに対し，英語の解釈（連言的解釈）は日本語とは逆で，否定が選言接続詞よりも広いスコープを取っている。そしてそれぞれの解釈が表す事態を比べると，英語の解釈は日本語の解釈の部分集合となっていることがわかる。

否定文中の選言接続詞の解釈は，日本語，英語以外にも様々な言語で分析がなされ，中国語（Mandarin），トルコ語，イタリア語は日本語と同じ選言的解釈になることが明らかにされている（郷路 2019）。他方，ドイツ語は英語と同じ連言的解釈になるなど，言語によっていずれかの解釈になることが指摘されている（the Disjunction Parameter, Crain 2012）。

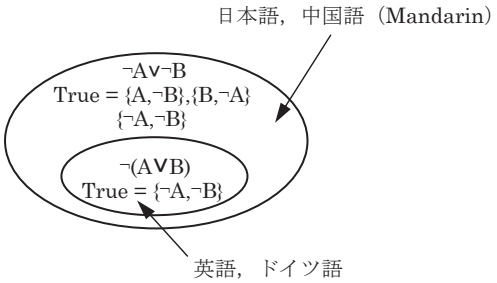

図 1　The Disjunction Parameter（Crain 2012, p.182 より筆者一部和訳）

接続詞の解釈の違いに関してさらに興味深いことは，（3a）や（4a）の選言接続詞を連言接続詞に置き換えて（5a）や（6a）のような文を作ると，日本語では（5b）のように連言的解釈に，英語では（6c）のように選言的解釈になることである。そしてこれらの解釈の関係は，図 1 とは逆で，英語やドイツ語が広く，日本語や中国語はその中に含まれるようになる（the Conjunction Parameter, Crain 2012）。以上の様に否定文中の接続詞の解釈は言語によって異なることが明らかになっているが，筆者の知る範囲では，この違いが言語の何によってもたらされるのかについての理論的説明はまだなされてないようである。

（5）a. メアリーはリンゴとバナナを食べなかった
　✔ b. メアリーはリンゴを食べなかった　そして／かつ　メアリーはバナナを食べなかった
　✘ c. メアリーはリンゴを食べなかった　か／または　メアリーはバナナを食べなかった

（6）a. Mary did not eat (both) an apple or a banana.
　✘ b. Mary did not eat an apple　AND　Mary did not eat a banana.
　✔ c. Mary did not eat an apple　OR　Mary did not eat a banana.

3. 先行研究

3.1　Grüter et al.（2010）

2 で見た日英語の選言接続詞の違いを基に，Grüter et al. は，母語が日本語の英語学習者グループと，母語が英語の日本語学習者グループが，それぞれ英語と日本語の否定文中の選言接続詞を正しく解釈できるかを実験を行い調査した。実験参加者は，英語学習者グループはカナダ在住の日本語母語話者 32 名（平均年齢 31 歳），日本語学習者グループはカナダおよびアメリカ在住の英語母語話者 20 名（平均年齢 28 歳）であった。実験では Goro and Akiba（2004）を基に作成された筆記形式の真偽値判断タスク（Crain & Thornton 1998）を行い，学習者は（7）

のような実験文が与えられたコンテクストに対して正しいかどうかを判断した。コンテクストは実験文の正しい解釈に合致するもの（連言的解釈）と，合致しないもの（選言的解釈）の二種類であった。なおコンテクストの詳細は，以下の 4 で同じ手法を用いた本研究の実験内容を説明する際に述べる。

（7）a. The horse ate the cake, but he didn't eat the carrot or the pepper.（英語学習者用の実験文）

b. 馬はケーキを食べたが，人参かピーマンを食べなかった（日本語学習者用の実験文）

実験結果は，英語学習者グループの平均正答率は 27.5% と非常に低く，日本語学習者グループの平均正答率 84% を大幅に下回っていた[1)]。両学習者グループの第二言語の習熟度は，実験とは別に行った英語および日本語の能力テストの正答率がほぼ同じであったことから（63 ～ 64%），同程度と推測される。ただし第二言語の学習開始時期や第二言語の自然なインプットの量は，英語学習者の方が日本語学習者よりも有利であった。英語学習者グループの学習開始年齢は平均 12 歳（10 ～ 13 歳），カナダでの滞在期間は平均 2 年 7 か月（1 か月から 9 年）であったのに対し，日本語学習者グループの学習開始年齢は平均 18 歳（11 ～ 37 歳）と遅く，日本での滞在期間も平均 1 年 9 か月（0 か月から 8 年 5 か月）と英語学習者よりも短かった。この様に，英語学習者が学習開始時期や推定されるインプット量において有利であるにも拘らず，日本語学習者よりも正答率が格段に低かった理由として，Grüter et al. は，図 1 で示されたように日本語の解釈が英語の解釈よりも広いことを挙げている。つまり，日本語が母語で英語を第二言語として学習する場合には，「日本語では可能な選言的解釈が，英語では不可能である」ということを示す否定証拠が英語のインプットの中で得られにくいために学習が遅れ，その結果正答率が低くなるのではないかと指摘している。

以上の様に Grüter et al. は，少なくとも筆者の知る限りでは選言接続詞の解釈を調べた初めての第二言語習得研究であり非常に有意義である。また習熟度が同程度と考えられる二グループ（日本語が母語の英語学習者と，英語が母語の日本語学習者）を比較することでその学習の困難さの違いを明確に示し，それを否定証拠の欠如の面から説明した点も巧みである。

3.2　Okuma（2022）

3.1 で見たように，Grüter et al. は，カナダ在住の英語学習者に実験を行い，学習者の選言接続詞の解釈が英語母語話者とは大幅に異なるという興味深い事実を明らかにした。そこで Okuma は，Grüter et al. の結果が，三ヶ月以上の海外滞在経験のない日本人大学生にも当てはまるのかどうかを調査した[2)]。調査に参加したのは日本の大学に通う 1 年生（日本語母語話

者 14 名）で，TOEIC のスコアは平均 635 点（範囲 500 ～ 730，標準偏差 67.5）であった。調査で用いた実験文は，Grüter et al. と同様，目的語位置に選言接続詞を含む否定文であったが，実験手法は Grüter et al. とは異なり，筆記形式の多肢選択タスクであった。実験の中で，参加者は（8）のような英文を読んで，ふさわしい解釈を選択肢より一つ選んで回答した。選択肢には，正答である連言的解釈（8b）の他，誤答である選言的解釈（8a）や，それ以外の解釈（8c）が含まれていた。また判断できない場合には参加者は（8d）I don't now.（わからない）を選ぶように指示された。この実験の結果，学習者の正答率は 17% で Grüter et al. の学習者の正答率 27.5% よりもさらに低いことが明らかになった。Okuma と Grüter et al. では実験方法が異なるため単純な比較はできないが，Okuma の結果は，英語を外国語として日本で学ぶ学習者は，英語を第二言語としてカナダで学ぶ学習者よりも，英語の接続詞の解釈の習得が遅れる可能性を示している。また Okuma の結果は，Grüter et al. の主張の一部である「第二言語／外国語学習者が，接続詞を解釈する際に，母語の知識を転移させる」ということを支持している[3)]。

（8）"Yuri didn't drink the coffee or the tea."
正しい解釈を 1 つ選んでください
　a. Yuri didn't drink the coffee OR Yuri didn't drink the tea.
　b. Yuri didn't drink the coffee AND Yuri didn't drink the tea.
　c. Neither (a) nor (b).
　d. I don't know.

4．実験

Okuma に引き続き，本研究では日本人大学生が英語の選言接続詞をどの程度正確に解釈するのかを実験を行い調査した。実験の参加者は，日本の大学で英語を学ぶ日本語母語話者 26 名で，年齢は平均で 19 歳（18 ～ 22 歳）であった。参加者はいずれも日本以外の国での滞在経験がなく，英語の学習開始時の年齢は平均で 11 歳（10 ～ 12 歳）であった。実験実施時の約 5 か月前に取得した TOEIC IP テストのスコアは平均で 628 点（範囲 550 ～ 735，標準偏差 36.5）であったことから，参加者の英語の習熟度は中級であると考えられる。

実験は Grüter et al. と全く同じ筆記形式の真偽値判断タスクを行い，実験文も Grüter et al. と全く同じものを用いた。ただし実験文には直接関係のないコンテクストの一部や錯乱文は変更し，より習熟度が低いと考えられる本実験の参加者にも取り組みやすいように修正した。実験の中で，参加者は，（9）（上の（7a）を再掲）のような目的語位置に選言接続詞を含む否

定文が，与えられたコンテスクトに対して正しいかどうかを判断した。

コンテクストは二種類で，(a) 連言的解釈，つまり (9) において馬が人参もピーマンもどちらも食べなかった場合と，(b) 選言的解釈，つまり (9) において馬が人参かピーマンかの（どちらかはわからないが）どちらか一つを食べた場合である。Grüter et al. の結果では，英語母語話者（15 名）は (9) の英文を，(a) のコンテクストに対しては 100% の割合で肯定し，(b) のコンテスクトに対しては 82.5% の割合で否定した。従って，もし学習者が英語を正しく理解しているならば，学習者は英語母語話者と同様に，(9) の英文を (a) の場合は肯定し（つまり「right」を選び），(b) の場合は否定する（つまり「wrong」を選ぶ）と予測される。

(9)（コンテクストが文と絵で提示）

The horse ate the cake, but he didn’t eat the carrot or the pepper.

☐ right

☐ wrong

実験実施に際しては，Grüter et al. に倣い，コンテクストは文章（日本語と英語の両方）と絵で参加者に提示された。まず参加者には，コンテクストの前提として，15 匹の動物がケーキ，人参，ピーマンを食べる競争に参加し，食べた物によって異なる賞をもらうことが説明された。（賞品は，野菜を両方とも食べた場合には王冠，人参かピーマンかを問わずどちらか一つの野菜だけを食べた場合にはネックレス，野菜を全く食べなかった場合には風船であった。）続いて三人のキャラクター（ハローキティ，ピカチュウ，ドラえもん）が（競争自体は見れないため競争の終了後に）動物が持っている賞を見てその動物が何を食べたのかを推測して答えることが説明された。そして参加者は，三人のキャラクターの答え（その中に実験文 (9) が含まれる）が正しいかどうかを判断して「right」または「wrong」を選び，「wrong」を選んだ場合には動物が食べた物を実験用紙に記入するように指示された。

実験文の数は，各コンテクストで 5 文ずつ，計 10 文である。その他，錯乱文として 29 文が含まれており，参加者は合計 39 文を判断した。実験の中で同じパターンの文が連続することのないよう，実験文と錯乱文はランダムに順序を入れ替えて参加者に提示された。また予想される「right」という回答と「wrong」という回答は，ほぼ同数（「right」が 19 文，「wrong」が 20 文）になるように錯乱文の数を調整した。実験用紙の最初には，実験の手順が文章で書かれると共に，参加者の理解を確認するためのサンプル問題が一つ含まれていた。実験の所要時間は約 20 分であった。

5. 結果と考察

5.1　グループ別結果

実験結果を図 2 に示す。図中の黒い棒グラフが本実験の学習者の結果である。図中の数字は，文が（a）（b）それぞれのコンテクストに対して「合っている（right）」という回答が，全回答の何パーセントを占めたかを表したもので，学習者 26 名の平均値である。また図中には，比較のために Grüter et al. の英語学習者の結果を白い棒グラフ（L2E）で，英語母語話者の結果を斜線の棒グラフ（L1E）で記載した。

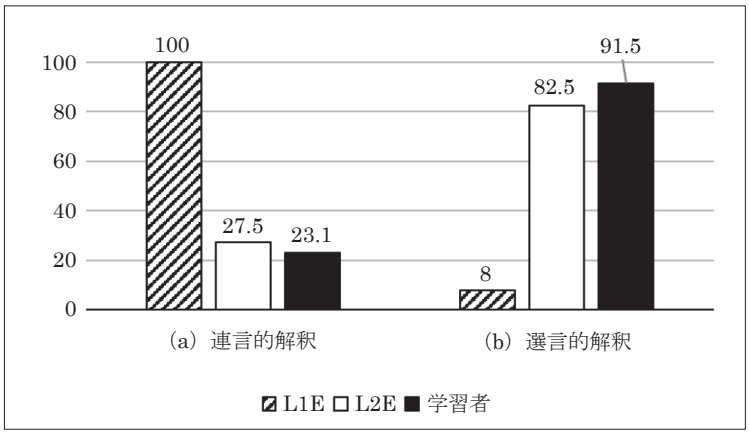

図 2　実験結果（図中の数字は，文が各コンテクストに合っていると判断した割合（%）のグループ平均を表す）

図 2 が示すように，本実験の学習者は，コンテクストが（a）連言的解釈の場合（つまりコンテクストが実験文の正しい解釈に対し適切な場合）には 23.1% の割合で「合っている（right）」を選んだ（グループ平均 23.1%，範囲 20 ～ 100，標準偏差 36.5）。この結果は，Grüter et al. の英語学習者（カナダ在住の日本語母語話者）の結果 27.5% と類似している一方で，同研究の英語母語話者の結果 100% とはかけ離れていた。この結果から，選言接続詞の正しい解釈の習得は，カナダ在住の英語学習者だけでなく，日本で英語を外国語として学ぶ日本人大学生にとっても困難であるということがわかる。また本研究の学習者の結果は，Grüter et al. の学習者よりもわずかに（4.4%）さらに母語話者とはかけ離れた結果になっている。本研究の学習者が英語圏での滞在経験がないのに対し，Grüter et al. の学習者はカナダに平均 2 年 7 か月滞在していることを考えると，両学習者の正答率の差は，英語の自然なインプットの量の差または英語の一般的な習熟度の差を反映しているものと考えられる。

続いてコンテクストが（b）選言的解釈の場合（つまり実験文の正しい解釈に合致しない場合）に

は，本実験の学習者は 91.5% の割合で誤答「合っている（right）」を選んだ（グループ平均 91.5%，範囲 60 ～ 100，標準偏差 21.3）。この割合は，先のコンテクストが連言的解釈の場合同様，Grüter et al. の英語母語話者の回答 8% にはほど遠く，カナダ在住の英語学習者の回答 82.5% に近くなっている。このことから，選言接続詞の不適切な解釈を否定することは，カナダ在住の英語学習者同様，日本で英語を外国語として学ぶ日本人大学生にとっても困難であるといえる。また本研究の学習者の結果と，Grüter et al. の学習者とを比較すると，本研究の学習者の方がさらに（9%）英語母語話者よりかけ離れた結果となっていた。これは連言的解釈のコンテクストの場合同様，両グループのインプットまたは習熟度の差を反映したものであると推定されるが，それを確かめるには別に調査を行い統計処理をする必要がある。

5.2　個人別結果

5.1 では実験結果のグループ平均を報告したが，以下に個人別の結果を報告する。図 3 は連言的解釈のコンテクスト（グループ平均 23.1%）の個人別の結果である。図の横軸は学習者 26 名を，TOEIC の取得スコアに基づいて英語の習熟度の低い順に J1 から J26 まで並べており，J1 が習熟度が最も低く（TOEIC のスコアが 500 点）で，J26 が最も高い（同スコアが 735 点）。もし習熟度が上がるに従って回答が母語話者（グループ平均 100%）に近づくのであれば，棒グラフの高さは左（J1）から右（J26）になるに従って高くなり 100% に近づくと予想される。ところが実際のデータは，図 3 のように習熟度に拘わらず 0% の結果が多く，個人別結果（%）と TOEIC のスコアには相関はほとんど見られなかった（相関係数 $r = 0.082$）。

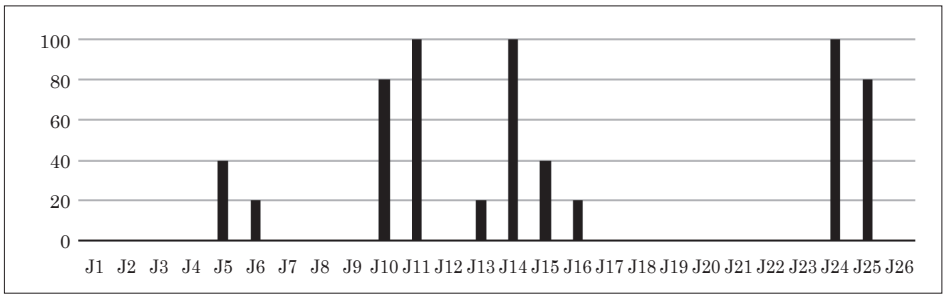

図 3　（a）連言的解釈の個人別結果（文が連言的解釈のコンテクストに合っていると各学習者が正答した割合 % を示す）

図 4 は選言的解釈のコンテクスト（グループ平均 91.5%）の個人別の結果を示している。もし習熟度が上がるに従って回答が母語話者（グループ平均 8%）に近づくのであれば，棒グラフの高さは左（J1）から右（J26）になるに従って低くなり 0% に近づくと予想される。しかし実際は，図 4 のように 26 名中 20 名（77%）が 100% の割合で誤った解釈をしていることが分かった。特に習熟度が J15 以上の学習者は全員が 100% であることから，個人別結果（誤答の %）

と TOEIC のスコアには予想とは逆の弱い正の相関が見られた（相関係数 $r = 0.030$）。

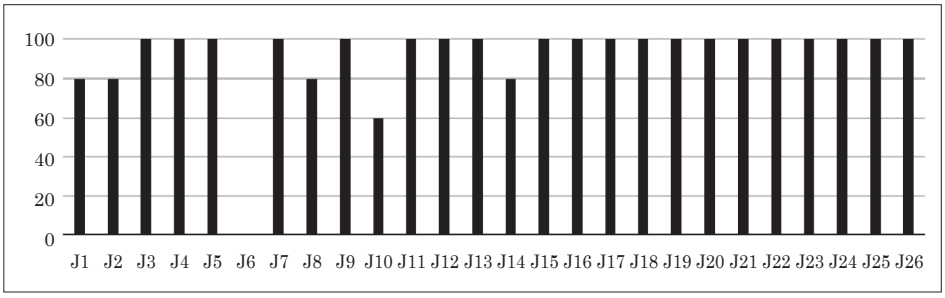

図 4　(b) 選言的解釈の個人別結果（文が選言的解釈のコンテクストに合っていると各学習者が誤答した割合 % を示す）

以上の個人別結果をまとめると，選言接続詞の解釈は，少なくとも本研究のような習熟度が中級の学習者にとっては困難で，習熟度が多少上がっても正答率はほぼ変わらないといえる。この結果は，5.1 で見たグループ別の結果において，本研究と Grüter et al. の学習者に英語圏の滞在の有無の違いがあるにも拘わらず結果が似通っていたこと（例えば正答率が 23.1% と 27.5% であったことなど）とも一致していると考えられる。言い換えるとこれらの結果は，日本語が母語の学習者が英語の選言接続詞の解釈をする際には，母語である日本語の転移が長く続き，目標とする英語の解釈を習得するには時間がかかることを示している。

5.3　Okuma との比較

本研究では先行研究 Okuma と同様の学習背景と習熟度の学習者から，異なる手法でデータを収集した。表 1 は両研究の学習者の習熟度と正答率を比較したものである。いずれの研究でも学習者は日本の大学に通う一年生で，英語圏を含め日本国外での 3 か月以上の滞在経験がなく，習熟度が中級（TOEIC のスコア平均で 635 点と 628 点）と類似していた。実験で用いた英文も，同一ではないものの否定文の目的語位置に選言接続詞が使われているという点で同じあった。

表 1　Okuma と本研究の学習者の習熟度と正答率の比較

		Okuma	本研究
学習者 （日本の大学 1 年生）	TOEIC のスコア	平均 635 点 （範囲 500 ～ 730）	平均 628 点 （範囲 550 ～ 735）
	英語圏の滞在経験	3 カ月以上はなし	全くなし
データ収集方法		多肢選択	真偽値判断
選言接続詞（否定文）の正答率		17%	23.1%

表 1 が示すように，本研究の学習者の正答率 23.1% は，Okuma の 17% よりもわずか 6.1% ではあるものの高い結果となった。Okuma で多肢選択タスクを用いた理由は二つで，(i)

Grüter et al. とは異なるデータ収集方法であっても学習者の正答率が低いのかを検証するため，と（ii）Okuma では本研究で扱った選言接続詞以外の文タイプも調べているので，コンテクストを読んで判断する必要のある真偽値判断タスクよりも，コンテクストを読む必要のない多肢選択タスクの方が，初級に近い学習者にとっても解答が容易で，その結果学習者の解釈を正確に測れるのではないかと考えたためである[4)]。しかしながら，結果を見る限りでは，学習者は問題なく真偽値判断タスクに取り組んで解答できたと考えられる。また実験後に筆者が参加者の数人にインタビューしたところ，このような実験に参加するのは初めてであったが問題なく取り組めたとのことであった。

5.4　まとめと今後の課題

5.1 ～ 5.3 をまとめると，本実験の結果から以下の二点が明らかになった。

（i）日本人大学生による選言接続詞の解釈は，正しい解釈を肯定することと間違った解釈を否定することの両面で，英語母語話者とはかなり異なっていた。

（ii）英語圏での滞在経験のない日本人大学生による選言接続詞の解釈は，先行研究 Grüter et al. で示されたカナダ在住の日本人英語学習者の結果と類似していた。

これらの結果は，第二言語習得研究に関して二つの示唆を与えていると考えられる。一つ目は，（i）からわかるように，学習者にとって第二言語の習得の難しさは一様ではなく，習得する項目によって非常に差が大きいということである。本実験で得られた選言接続詞の解釈の正答率は 23.1% と非常に低かったが，実験参加者の習熟度は中級であることから，一般的な英語の文法事項であれば，正答率は（英語母語話者同様には至らずとも）ずっと高かったであろうと考えられる。学習者の正答率が低かった原因として，Grüter et al. では日本語では可能な選言的解釈が英語では不可能であることを示す否定証拠が学習者に得られにくいことを挙げ，その結果学習が遅れると説明している。本研究ではなぜ正答率が低かったかの原因の解明には至らなかったので，今後はその解明に取り組む必要がある。具体的には，連言接続詞の解釈は 2 で見たように選言接続詞とは逆で日本語が英語の部分集合になることから，連言接続詞の解釈の習得を調べると否定証拠の有無の効果について検証できると考えられる。

二つ目は，（ii）からわかるように，選言接続詞の解釈は，英語圏に滞在し自然なインプットを 2 年 7 か月程度受けてもなお難しく，学習者は母語である日本語の知識を使い続けるということである。一般に英語の冠詞や動詞形態素の知識は習得が遅れたり不完全になったりすることが報告されているが，意味解釈の習得はそれらとは異なり，思春期以降に学習を開始した場合でも完全な習得が可能であると考えられている（Slabakova 2008）。本研究の結果はそのよ

うな従来の見方を覆す可能性があり，今後研究を続けることで意味解釈の習得について新たな知見をもたらすことが期待できる。本研究の結果をさらに確かなものにするためには，母語が日本語以外の英語学習者についても同様の実験を行い確認する必要があるだろう。また本研究では比較対象として Grüter et al. の中の英語母語話者のデータを用いたが，より正確な分析を行うために，学習者のデータと共に英語母語話者のデータも改めて収集する必要がある。

6. 結論

日本語と英語の否定文中の選言接続詞は解釈が異なることが知られているが，その第二言語習得研究はまだ十分になされていない。そこで本研究では，日本語が母語の学習者が英語の選言接続詞をどの程度正しく解釈できるのかを明らかにするため，日本人大学生を対象に，先行研究 Grüter et al. で用いられた真偽値判断タスクを行い検証した。その結果，(i) 日本人大学生による選言接続詞の解釈は，正しい解釈を肯定することと間違った解釈を否定することの両面で，英語母語話者とはかなり異なっていること，(ii) 英語圏での滞在経験のない日本人大学生による選言接続詞の解釈は，Grüter et al. で示されたカナダ在住の日本人英語学習者の結果と類似していることが明らかになった。しかしその一方で，本研究ではなぜ選言接続詞の解釈の習得が困難なのかの解明には至らなかった。従って今後の研究では，選言接続詞の解釈の習得が遅れる原因を明らかにするために，母語が日本語以外の英語学習者と比較したり，連言接続詞の解釈の習得を調べたりする必要がある。本研究の結果は，意味解釈の第二言語習得は比較的問題が少ないという従来の見方を覆す可能性があり，今後研究を続けることで言語習得の新たな側面を明らかにすることが期待できる。

＜注＞

1) ここでの正答率はコンテクストが実験文の正しい解釈に合致する場合（連言的解釈）の数値である。
2) なお Okuma では Grüter et al. では調査されていなかった英語の連言接続詞の解釈や，日本語の選言および連言接続詞の解釈も調査しているが，それらは本研究には直接関係がないのでここでは論じない。
3) Okuma の調査結果のうち，英語の連言接続詞の習得については必ずしも Grüter et al. の主張を支持しなかったが，連言接続詞は本研究の対象外であるためここでは論じない。
4) ただし多肢選択タスクは，あいまい文など複数の解釈が可能な場合は参加者の解釈を正確に測ることができないなどの欠点がある（White, Bruhn-Garavito, Kawasaki, Pater & Prévost 1997）。

＜参考文献＞

Crain, S. (2012). *The Emergence of Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Crain, S. & Thornton, R. (1998). *Investigations in Universal Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.

Goro, T. & Akiba, S. (2004). Japanese disjunction and the acquisition of positive polarity. In Y. Otsu (Ed.), *The Proceedings of the fifth Tokyo Conference on Psycholinguistics* (pp.137-162). Tokyo: Hituzi Syobo.

Grüter, T., Lieberman, M. & Gualmini, A. (2010). Acquiring the scope of disjunction and negation in L2: A bidirectional study of learners of Japanese and English. *Language Acquisition*, 17(3), 127-154.

Okuma, T. (2022). A Preliminary Study on Second Language Acquisition of Logical Connectives with Negation. *Philologia*, 53, 41-60.

Slabakova, R. (2008). *Meaning in the Second Language*. Berlin: Mouton de Gruyter.

White, L., Bruhn-Garavito, J., Kawasaki, T., Pater, J., & Prévost, P. (1997). The researcher gave the subject a test about himself: Problems of ambiguity and preference in the investigation of reflexive binding. *Language Learning*, 47(1), 145-172.

郷路拓也（2019）「否定極性・肯定極性の第一言語習得」，澤田治・岸本秀樹・今仁生美（編）『極性表現の構造・意味・機能』第 10 章，p.261 ～ 287，開拓社.

白畑知彦（2015）『英語指導における効果的な誤り訂正―第二言語習得研究の見地から』大修館書店.